

我が
思い出の
一枚

武道を追い求めて 武道空手に懸ける想い

日本の空手から世界のカラテへ――。
今や、世界中どこに行つても

空手道場を見つけることができる。

当たり前の話だが、

空手が世界中に普及したのは、

空手を世界に普及した人がいるからである。
その代表的な人物が、

西山英峻氏、その人である。

国際伝統空手連盟（ITKF）の理事長として、
現在も武道空手の普及に尽力している西山氏。
空手はどのようにして世界に広まつたのか。
そして今、
空手はどこに向かっているのか。
その答えがここに語られる。

戦争と少年時代

1928年（昭和3年）10月10日、西山英峻氏は東京都江東区深川で生まれた。父親は仕事で家にいないことが多かったが、西山家にはいつも20名ほどの書生があり、家中は常に賑やかであった。

「父は弁護士をしていて、とくに人権運動に情熱を傾けていたようです。当時、国有地に家を連ねて住んでいた貧しい人々を政府が一方的に追放しようとしたことがあります。父は大変に憤慨して政府に抗議していました。後に社会党の委員長になつた浅沼稲次郎とともに行動していたのですが、父は左翼主義者でもなく、政治家になるつもりもなかったようでも、やっぱ社会奉仕やボランティアのように働いていました。とにかく人の道に外れたことが許せない、という性格の人でした」（西山氏）

米国アマチュア空手連盟（AAKF）会長
国際伝統空手連盟（ITKF）理事長
西山英峻（にしやま・ひでたか）

1928年（昭和3年）、東京都に生まれる。11歳のとき、目黒にあった遠山寛賢の修道館に入門。また、松濤館の門をくぐって船越義珍に直接指導を受ける。その後、拓殖大空手部に入部して主将を務め、1950年（昭和25年）には日本学生空手連合を結成。空手の世界的な普及と日本空手界の大同団結の2大事業に大きく関わった。1974年（昭和49年）、国際伝統空手連盟を設立し、理事長に選出。2000年（平成12年）には、勲四等瑞宝章が授章された。現在も武道空手を推進し、空手界の発展に更なる貢献が期待されている。

氏の周囲に立ち込める。1936年（昭和11年）2月26日、かの有名な2・26事件が勃発。西山少年、小学2年生のときであつた。

「当時のことは鮮明に憶えています。学校に行こうと外に出ると、雪が降っていて、兵隊さんに『坊や、今日は休みだよ』と言われました。子供の私には政治背景などは分かりませんでしたが、銃を持って立っている兵隊の緊張した姿は今でも忘れられません」（西山氏）この事件以降、軍部が国政の主導権を握ることになり、日本は戦争に突入していくことになる。

ヤンチャ坊主

しかし、時代の空気とは裏腹に、少年人の道に外れたことが許せない、という回つていたようだ。

「ヤンチャ坊主だったから、よく怒られたものです（笑）。中学2年生のときになると、にわかに時代の暗雲が西山

建長寺という禅寺に行かされたことがあります。朝の暗い組されました。無念無想になれと言われるが、1日に3、4時間も座っているとやはり眠くなってしまう（笑）。少しでも身体が揺らぐと、パンと叩かれて、夏で薄着をしていましたから非常に痛い思いをしました。しかも、食事のお粥は水ばかりで米粒は

数えるほどしかありません。本来は音を立てて食べとはいいけないのですが、タクワンを食べるときは音を立てても許されるので、わざとバリバリと大きな音を立てることで空腹の憂さを晴らしたものでした（西山氏）

そんな腕白小僧を自認する西山氏が、少年時代に強さに憧れるのは当然の成り行きであった。

「戦国時代の猛将・加藤清正は虎のいる檻に入れと言われ、怖気づくことなく檻に入つて虎を睨みつけました。すると、虎は恐れをなして大人しくなつたそうであります。今度は、位の高いお坊さんが檻に入上げてしまふ、柳生宗矩の無刀取りの話を読んだことがあります。素手で剣に勝つてしまうなんて凄いな、と剣豪の逸話に感心していました。また当時、黒沢明監督の映画『姿三四郎』が封切られ、そこに榎垣源之助という空手の達人が出てきました。これがカッコよかつたんです（笑）（西山氏）

また、小学校に入学した頃から剣道を習っていた西山氏が、一生涯を賭けて追求することになる武道に興味を持ち始めたのもこの頃である。

空手の王道を歩む

「剣を持たずに素手で相手の剣を取り上げてしまう、柳生宗矩の無刀取りの話を読んだことがあります。素手で剣に勝つてしまうなんて凄いな、と剣豪の逸話に感心していました。また当時、黒沢明監督の映画『姿三四郎』が封切られ、そこに榎垣源之助という空手の達人が出てきました。これがカッコよかつたんです（笑）（西山氏）

当時、空手はまだ社会的に認知され



若き日の西山氏（右）。少年時代は、強さに強い憧れを持っていたヤンチャ坊主であった。

我が 思い出の 一枚



黎明期から、数多くの国際大会を開催してきた西山氏（手前1番右）。

ていな状況だったが、西山氏は空手道場を探し回り、目黒にあった遠山寛賢氏の修道館に入門。15歳にして、空手の道に入った。そして、西山氏の自宅に出入りしていた拓殖大生の紹介で、後に空手界の総本山となる、船越義珍氏の松濤館に通うようになる。

「松濤館で稽古した期間は短かったですが、明けても暮れても騎馬立ちはかりしていた記憶があります。当時、目白にあつた松濤館は太平洋戦争末期の昭和19年に焼けてしましましたが、船越先生に直接指導していただけたことは非常にありました」と西山氏。

その後、空手道への情熱に燃える西山氏は、ケンカ大学と畏敬される拓殖大に入学。もちろん名門・空手部に入部し、空手の王道を歩き始めた。

「毎年、関東の大学と関西の大学が集

学連を組織

「拓大に入った動機は、脇光三（拓大第1期卒業生）先輩の伝記『落つる夕陽よしばらくとまれ烈士・脇光三伝』を読んだことです。拓大には凄まじい先輩がいると憧れて入学し、空手部に入りました。1945年（昭和20年）に戦争が終わり、それまでの価値観が180度変わってしまったことに世間

が「日本学生空手連合」の設立に発展するのだが、その渦中に西山氏の存在があった。1950年（昭和25年）11月、西山氏は同連合初代委員長として、明治大学講堂において結成演武大会を開催した。

「当時、流派の壁を乗り越えて各大学と交流を図ることは、決して簡単なことではありませんでした。しかし、大学空手部の集まりのときに、学生の組織を作ろうじゃないか、という話があつたので、私が首領をとつて皆さんに協力してもらつたのです」（西山氏）

この組織が、現在の「全日本学生空手道連盟」の前身となつたことは言うまでもないだろう。

空手からカラテへ

の中でも西山氏はめきめきと頭角を現し、空手部の主将を任されるほどの実力を身につけた。当時の大学空手の状況を西山氏は次のように語る。

1951年（昭和26年）、アメリカ戦略爆撃隊から日本へ派遣された戦闘術教官に対して、空手の指導が行われた。

このとき、西山氏も船越義珍氏をサポートするために武道教育スタッフ（責任者は柔道の三船久蔵）の一員として指導に当たっている。その後には、アメリカ空軍からの招待を受け、柔道、アメリカ空軍からの招待を受け、柔道、合気道、空手道からなる武道使節団の一員として、アメリカ各地を訪問して指導を行つた。

この外国人への指導によって、空手が世界に拡大する基盤が確立した。空手を含む日本武道が、帝國主義の温床としてGHQによって抑制されることもあつたが、しかし、アメリカ人たちが武道というものに興味を持つていたことも事実であつた。

また、西山氏は世界に出て国際的に活躍できる空手家の育成にも心血を注いでいる。

「1955年（昭和30年）に、私の出身母体である日本空手協会が文部省認可の社团法人として正式発足し、私は初代指導部長となりました。そして、中山正敏師範をサポートして指導員研修制を設けたのです。現在海外で高い評価を受けている空手家は、この頃に育つた人が多いと思います」（西山氏）

西山氏自身も、1961年（昭和36年）7月からアメリカ・ロサンゼルスに腰をすえて、空手の指導を始める。そして、その年の12月には、全米の日本空手協会系の代表を集めて「全米空手連盟」を結成し、会長に就任。ロサンゼルスで、第1回全米大会が華々しく開催されたのである。

さらに、1960年（昭和35年）に西山氏は英文による空手教本『素手による

戦い・空手』を出版。これが現在まで80版を重ねる大ベストセラーとなり、急速な空手の世界的発展をもたらした。

空手界の大同団結

日本の空手が世界のカラテへと飛翔する過渡期に重大な役割を果たした西山氏。その一方で、日本では国内に拡散した空手を一つにまとめる作業が行われていた。学生時代から、空手は流派の垣根を取り除いて大同団結するべきである、という信念を持っていた西山氏も、当然、全日本空手道連盟の設立に奔走している。

「1960年（昭和35年）、各流派を統合した全日本空手道連合が発足し、同年の秋に大阪で結成大会を開催しました。現在、ハワイで活躍されている小高忠三さんが選手として出場していたのを思い出します。しかし、大会運営は一筋縄ではいかず、様々な問題が発生しました。私も幹部として大会に携わりましたが、やはり流派間の軋轢は深く大きかったのです。結局、この大会では各流派が混交した試合はできず、それぞれの流派ごとの試合が行われました。また、各先生方の演武する順番などでも揉めることがありました」（西山氏）

この第1回大会のみで全日本空手道連合は自主解消となってしまったが、これが全日本空手道連盟設立の大きな一步になつたことは間違いない。そして、空手界の大同団結という一大事業は次の機会を待つこととなつた。

「1964年（昭和39年）の東京オリンピックが開催されるときに、空手の

世界組織が結成されればオリンピックに参加できるという話がありました。そこで慌てて全空連を設立した訳です。結局、オリンピックには参加できませんでしたが、その名前だけは残しておきました。そして、東京大の江里口（栄一）さんや中山（正敏）先生が中心となり、その中身を一新して、全空連が発足したのです」（西山氏）

世界大会に向けて

また、この頃から国際大会が開催され始めたが、その先鞭をつけたのも西山氏であった。国際試合の黎明期にも西山氏は深く関わっていたのだ。

「1963年（昭和38年）に、私が大会組織委員長を務めさせていただいて、アメリカの主流派団体に協力を呼びかけ、日本から流派混合の『全日本学生空手道連盟』代表チームを招待し、日米親善空手道大会を開催しました。前・全空連副会長の真野（高二）先生が学連の監督でした。これが空手道史上初の国際大会になりました」（西山氏）

また、西山氏はアメリカ空手道の主流派代表を集めて「世界招待大会組織委員会」を組織し、世界招待空手道大会をメキシコで開催している。この大会は日本及び各大陸チームが参加した世界規模の大会となつた。

「このときの日本チームは、全日本空手道連盟によって結成されたチームでした。笹川良一先生を团长として、選手、各流派の最高責任者が揃つてメキシコにやつきました」（西山氏）



アメリカに渡った西山氏は、そのコネクションを活かして国際大会を開催し、空手を世界に普及させた。



いました（笑）（西山氏）

第2回大会では、審判のジャッジがフランスの有利に傾き、明らかに力量が上であつた日本人選手に不利な判定が行われた。また、フランス連盟が自らに有利な組合せ表を何の許可もなく提出したために、審判長を務めていた「中山（正敏）先生もカンカンに怒って退場してしまった」（西山氏）という。

ITKFを設立

空手の普及と発展には、試合制度が必要不可欠であったが、その一方で試合制度がもたらした弊害もある。そのことに

ついで、西山氏は次のように語る。
「空手が世界各国に普及し、国際化すれば、正式なルールが必要になります。審判の方法を明文化しても、一本の突きがどのような状態で突かれるものか、説明してなければ意味がありません。

最近の国際大会を観ると、技が未熟でも突きが届いてさえいれば良い、どんな方向からでも突けば良い、という風潮になっています。これでは、もはや空手とは言えないのではないかでしょう。

武道空手とは？

武道空手を標榜するITKFだが、その特徴はいかなるものであろうか。西山氏の弟子であり、WKFの空手もしていたルーベン・シャーフ氏にその違いを聞いた。

「ITKFの空手は、スポーツではなく武道です。ですから、身体の動かし方のルールによってなされなければなりません。野球のルールが野球そのものです。空手もルールをきちんと整備しなければ、間違った空手になってしまいます」（西山氏）

「第1回大会におけるルールの問題が、第2回フランス大会の大トラブルに発展しました。第2回大会も正式なルールが設定されることなく、フランス連盟は空手を知るはずもない柔道の審判員に試合を裁かせたのです。大会前の会議で、私もルールについて意見をガングンぶつけたのですが、最終的には西山氏を中心とする「武道空手」が成立し、最終的に分裂する結果となつた。

ルールの問題

さらに、この大会の後には、西山氏を議長とする世界空手会議が行われ、2つのことが議決された。1つは、空手道の世界組織を結成すること。もう1つは、1970年（昭和45年）に東京で第1回世界空手道選手権大会を開催することであった。

間の溝が埋まつていなか状態でした』

正式なルールが決定されないまま世界大会が東京・日本武道館で開催され、結局、日本空手協会の試合ルールを英訳して各国に配ることになった。また1国1チームが原則であったが、日本は流派の関係で複数チームが参加した。このことで、日本は世界から大きな非難を浴びてしまう。

「メキシコでの会議のとき、私は第1回世界大会の開催地は空手道の発祥地である日本でなければならないと主張しました。そして日本開催が決定したのですが、日本に帰国すると大会運営が何も進んでいませんでした。規約と試合ルールを早急に作らなければならぬ進言したのですが、それどころか、まだ各流派の

1974年（昭和49年）、「武道空手」

を推進する国連盟からなる「国際伝統空手連盟」（ITKF）が結成され、西山氏は理事長に選出された。

「ITKFを立ち上げてから、私は空手の再教育を行つてきました。あやふやな空手の試合制度を世界に推進したことで、空手が本来の姿を見失つてしましました。私はその責任を痛感しています。ですから、正しいルールを設定し、『空手とは何か』ということを改めて考へる必要があると思うのです」（西山氏）

そして、試行錯誤する西山氏が行き着いたのは、空手の持つ武道性であった。西山氏の空手は武道という原点に回帰したのだ。

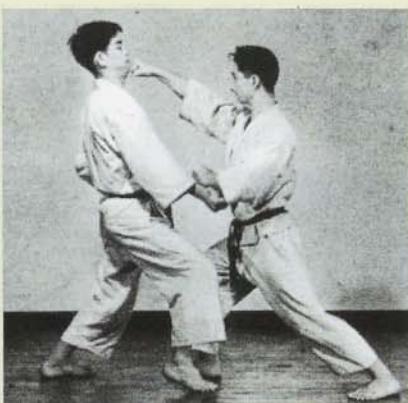
まうのです」(シャーフ氏)

では、ここで具体的な武道空手の技術を紹介しよう。例えば、突きについて西山氏は次のように語る(写真A参照)。

「右の脇の下から握った拳の手の甲を下にして、それを真っ直ぐに突き出す。極まる瞬間に腕を並列運動から回転運動に変えることで、エネルギーを4倍に倍加することができるのです。さらに身体の全てのエネルギーを短時間で相手にデリバリーするには、踵を床につけてその反動力を利用すること、また全身の筋肉を身体の中心軸に向かって締めることが大切です。これで一撃必殺と言われる衝撃力が發揮される元になるのです」(西山氏)

さらに技の速さについても、西山氏は次のように語る(写真B参照)。

「全ての技は意識の焦点をつくるなければなりません。例えば、蹴りの場合尾骨を意識して動作することが重要となります。尾骨を回すと、その周りの筋肉も一緒に動きます(随伴運動)。



写真A



写真B

脳から手や足に命令が伝達されますが、それでは遅すぎます。命令を尾骨から送るよう意識すると、脊髄周辺の筋肉が自動的に動くので蹴りは速くなるのです」(西山氏)

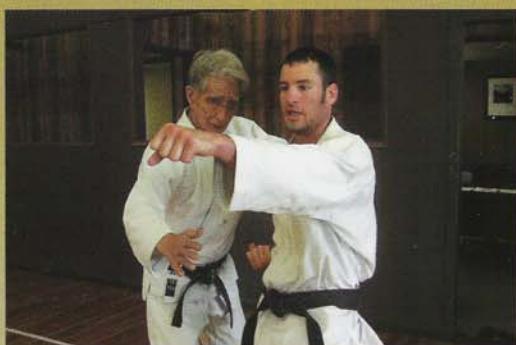
またITKFでは、相手を思いやる武道精神の礼儀を尊重している。

「私が入門した当時の松濤館は狭い道場でしたが、その松濤館流がここまで世界に拡がったのは、その武道性によるところ大きいと思います。日本の精神文化、身体文化である武道性に魅力を感じたからだと考えています。私はあくまでも伝統にこだわった、武道空手を後世に残すことに全力を尽くす覚悟でいます」(西山氏)

常に第一線で空手界を牽引してきた西山氏。その功績が認められて、2000年(平成12年)には、その功績が認められ、勲四等瑞宝章を授章された。しかし、現在も西山氏の行動力が衰えることはない。これからも西山氏の武道への追及は続いていくのだ。

ロサンゼルス 西山道場にて

稽古前の瞑想。



ルーベン・シャーフ氏を指導する西山氏。



西山氏と弊社・中村文保社長。



下段払いが極まる瞬間に腰を落とすことによって、地面との反力を利用する。これでエネルギーが30倍に高まるという。